

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 16 日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02314

研究課題名(和文) モードのモダニズム 異文化接触から読み解く両大戦間期のパリ・モード

研究課題名(英文) Modernism in fashion - Parisian mode in the interwar period seen through intercultural contact

研究代表者

朝倉 三枝 (ASAKURA, MIE)

フェリス女学院大学・国際交流学部・教授

研究者番号：90508714

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀初頭のパリで、前衛芸術家がアフリカ美術と遭遇し、モダン・アートの出発点が築かれたことはよく知られるが、本研究はそうした非西欧圏の影響が同時代のファッションにまで及んでいたことを明らかにすることを目的とした。ガブリエル・シャネル、ジャンヌ・ランバン、マリアノ・フォルチュニ、藤田嗣治など、具体的事例を検討した結果、日本や中国、アフリカなど、非西欧圏のアイデアや造形を取り込みながら、両大戦間期のパリで、機能的で洗練された現代ファッションが形作られたことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでファッション研究においてモダニズムといえば、シャネルのリトルブラックドレスに象徴される機能性や合理性と共に説明されてきた。しかし、異文化接触という観点に立った本研究は、両大戦間期のフランスに現れたエグゾティズムと結びつきながら、モダンで洗練されたパリ・モードが生み出されたという新たな視座を提示した点に学術的意義が見出される。さらに、書籍の出版により、研究成果を一般の人にも広く伝えたという意味で、社会的な意義もある。

研究成果の概要(英文)：It is well known that avant-garde artists in early twentieth-century Paris encountered African art, establishing the starting point for modern art, but this study aimed to clarify how such non-Western influences extended to fashion of the same period. The study of specific examples, including Gabrielle Chanel, Jeanne Lanvin, Mariano Fortuny and Tsuguharu Fужita, revealed that functional and sophisticated contemporary fashion was born in Paris between the two world wars, incorporating ideas and forms from the non-Western countries such as Japan, China and Africa.

研究分野：西洋服飾史

キーワード：モダニズム パリ・モード 異文化接触 ガブリエル・シャネル ジャンヌ・ランバン マリアノ・フォルチュニ 藤田嗣治

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究課題に関わる先行研究で、非西欧圏の造形美術とモダニズムアートの関連性を最も大規模に論じたという点で画期的だったのが、1984-85年にニューヨーク近代美術館で開催された展覧会、“Primitivism” in 20th Century Art である。同展では、モダン・アートの作品 150 点と、アフリカ、オセアニア等の部族美術の作品 200 点を並置し、両者の「親縁性」を視覚的に浮かび上がらせることが試みられた。ただし、同展の展示作品は絵画と彫刻に限定され、衣服や染織品には及ばなかった。一方、ファッションの分野で関連する先行研究として重要なのが、「モードのジャポニスム」展(京都国立近代美術館ほか、1994年)である。日仏の着物や染織品が、西洋服飾や美術工芸品にいかにも多くの影響を与えたかを検証してみせたこの展覧会は、世界的にも注目を集めた。しかし、本研究が関心を寄せる両大戦間期については言及があったものの、まだ議論の余地が残されていた。加えてファッション研究において、モダニズムの問題とアフリカ美術の関連性に着目した研究自体、まだほとんど出てきていない状況であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀初頭に過剰な装飾とコルセットの極端な締め付けにより、ある種の限界に達していた西洋の女性服が、非西欧圏のアイデアや造形性を取り込むなか、いかにして機能性と合理性を求める現代服の時代へと歩みを始めたのか、現代モードの幕開けを異文化接触という観点から読み解いていくことにある。現代服の原点とされるシャネルのリトル・ブラック・ドレスをはじめ、両大戦間期のパリ・モードに現れた衣服や布地デザインを、同時代のフランスに現れた日本や中国、アフリカ美術の流行に重ねて捉え、現代服が形成される過程において、非西欧圏の造形物がどのような影響を及ぼしたかを解明する。

3. 研究の方法

本研究の資料調査は、おもにフランスの国立図書館や装飾美術館、さらに原始美術を専門とするケ・ブランリー美術館、モードを専門に扱うパリ市立ガリエラ衣装美術館、メゾン・ランバンのアーカイブ等で行った。当初は可能であれば、イギリスやベルギー等の図書館や美術館でも調査を行いたいと考えていたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、叶わなかった。ただし、海外渡航ができない間も、以前に収集した資料の整理や精読を行ったほか、海外の図書館や美術館がオンラインで公開している資料の収集や作品分析も精力的に行い、本研究の推進を図った。中でも、ニューヨークのメトロポリタン美術館、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館、パリの装飾美術館が所蔵するコレクションについては幅広く閲覧を行い、考察を重ねた。

4. 研究成果

本研究を通して、とりわけ大きな成果が得られたのは、ガブリエル・シャネルについてである。1926年にアメリカ版『ヴォーグ』誌 10月1日号に掲載されたシャネルの黒いドレスは、大衆車フォードになぞらえられたが、それはデザインが簡素であるがゆえに、コピーも容易で、大量生産される既製服という形で、あらゆる階層の女性たちに着用されたからであった。これまで先行研究の多くは、シャネルのリトル・ブラック・ドレスを、この「フォード」という言葉に結び付け、機能主義的なモダニズムの文脈から説明してきた。しかし、本研究では、1910-20年代のパリで、黒く艶光りする漆がモダンな新しい素材として注目を集め、漆のインテリアが大流行したこと、また20世紀初頭に前衛芸術家たちを魅了したアフリカの美術工芸品が、戦後の1920年代には広く装飾芸術にまで広がり、アフリカ風の家具や調度品が多数、作られるようになったこと、さらに1925年10月、パリのシャンゼリゼ劇場で「ルヴュ・ネーグル(黒人レビュー)」が開幕し、アメリカからやってきたダンサーのジョセフィン・ベイカーにパリの人々が夢中になったという時代背景に注目した。そうした同時代の関心が、1920年代のパリで空前の黒ブームを生み、黒が流行色として急速に浸透し、他の誰にも先駆け1910年代からシンプルな黒い服を好んで手がけていたシャネルのドレスが大きな注目を集めたことを明らかにした。またシャネルは、1910年代より中国の कोरोマンデル屏風の蒐集をはじめ、プライベート空間を漆で埋め尽くしていた。いつも身近なところに漆を置き、生涯、愛好していたという意味で、漆はシャネルの大切な着想源の一つであったことがわかる。従来のフォードと結びついた言説は、あくまでも海の向こうのアメリカでなされたものであり、シャネルが活動の拠点としたフランスにおいては、黒いシンプルなドレスの流行は、日本や中国、アフリカなど、「他者」のイメージが幾重にも折り重なった上に成立していたという新たな見解を示すことができた。

本研究では、シャネル以外のクチュリエや芸術家の仕事にも目を配り、調査・考察を進めた。その一人、ジャンヌ・ランバンの創作にも、日本の影響が見られることが判明した。具体的には、ランバンが1920年代にドレスの装飾として用いていたモチーフの中に、日本の家紋集や着物

地の織紋集から採った文様があること、また帯を思わせる幅広のリボン使いや、黒地に朱色を合わせる漆塗りのような色使いなど、デザインの随所に日本の影響が見られるドレスが複数、確認されたことも、新たな発見であった。また、ヴェネツィアに拠点を置きながらも、1910-20年代のパリで人気を博したスペインの画家マリアノ・フォルチュニが手がけた服地デザインは、古代ギリシャに始まり、ルネサンス、コプト、ビザンチン、イスパノ・モレスク、インド、中国、そして日本など、古今東西、さまざまな国の文様が見出された。調査を重ねる中、フォルチュニが布地制作に際し、もとは織りや刺繍などで表現されていた文様も全てプリントの技法で写し取ることで、リボンやレースなどの立体的な装飾を加えることなく、独特の雰囲気なたたえた軽やかな布地を実現し、この時代にコルセットを脱ぎ捨て、自らの足で歩きだした女性たちの身体を解き放つ新しい衣服を生み出すに至ったことを明らかにした。さらに本研究では、1929年にフランスのテキスタイルメーカー、ルシュール社のために画家の藤田嗣治が手がけた布地デザインについても調査、考察を行った。そして、藤田が「波」や「雪」、「コウノトリ」のような日本的なモチーフを手がけたほか、手元にあった中国の漢字辞典『説文解字』を参照し、画数の少ないシンプルな文字や部首をそのままモチーフとして使ったこと、さらに日本の小紋を思わせる小さな柄を好んだり、日本的な響きを持つ名前を布地につけるなど、随所に日本的な要素を散りばめながら、クチュリエからも評価されるテキスタイルデザインを手がけていたことが判明した。藤田については、近年、国内外で再評価が急速に進んでいるが、これまで布地デザインに関する研究はなかったため、その点で藤田研究に一石を投げられたものと思われる。

なお、本研究課題を進めるなか、フランスの美術館やアーカイブには、未整理の日本の文献や、日本製と思われる衣服や装飾品が少なからず残されていることを知った。日本語を含む資料は、海外の美術館の学芸員らに理解することは難しく、一方でそうした一次資料や作品は研究代表者にとって非常に興味深い。今後は海外との美術館とも連携を図りながら、ぜひそうした眠れる資料・作品の発掘も行い、モードのモダニズムに関する考察をさらに深めていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 朝倉 三枝	4. 巻 53
2. 論文標題 リトル・ブラック・ドレス再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 77-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朝倉三枝	4. 巻 なし
2. 論文標題 20世紀初頭のファッションにおけるマリアノ・フォルチュニの革新性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『マリアノ・フォルチュニ 織りなすデザイン展』図録	6. 最初と最後の頁 220-226
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朝倉三枝	4. 巻 21
2. 論文標題 藤田嗣治のテキスタイルデザイン 1920年代末、ルシュール社とのコラボレーション	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フェリス女学院大学国際交流学部紀要『国際交流研究』	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 朝倉三枝
2. 発表標題 藤田嗣治と布 ルシュール社のためのテキスタイルデザイン
3. 学会等名 日本女子大学総合研究所共同研究「卒業生小林孝子の衣服標本研究」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 朝倉三枝
2. 発表標題 リトル・ブラック・ドレスの源泉を求めて シャネルと異国趣味
3. 学会等名 ファッション文化研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 朝倉三枝
2. 発表標題 1910-20年代のパリ・モード 異国へのまなざし
3. 学会等名 中部大学民族資料博物館2018年秋季連続講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 朝倉三枝
2. 発表標題 藤田嗣治のテキスタイル・デザイン 1920年代後半、ルシュール社とのコラボレーション
3. 学会等名 デザイン史学研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 朝倉三枝	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京美術	5. 総ページ数 80
3. 書名 シャネルと20世紀モード	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------